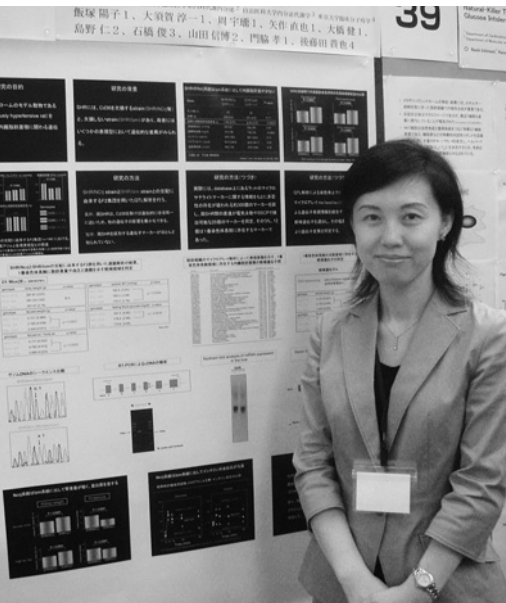


患者さんの心に響く一言を

糖尿病は世界的に増加しており、二〇〇三年に一億九四〇〇万人であった世界の患者数は、二〇二五年には三億三三〇〇万人に達するのではないかと推定されている。特にアジア諸国においてその増加が顕著であり、今や糖尿病の発症予防対策は、先進国のみならず、開発途上国においても、世界全体で強く求められている。日本においても、過食、高脂肪食、運動不足等ライフスタイルの変化に伴い、糖尿病をはじめとする生活習慣病が急増しており、二〇〇二年糖尿病実態調査によると、糖尿病が強く疑われる成人は約七四〇万人と推測され、可能性を否定できない予備軍と合わせると約一六二〇万人に達し、一九九七年前回調査



2007年日本動脈硬化学会
年次学術集会でポスター発表

るよう、苦勞しながら工夫するところにより、苦勞を感じない毎日である。一方、環境因子と並行して、遺伝因子の関与にも着目して、今もインスリン抵抗性原因遺伝子を探索する研究を続けており、現在は幾つかのインスリン抵抗性候補遺伝子を同定し、それぞれの解析を進めている。将来糖尿病やメタボリック症候群をはじめとする生

に比べ、約二割も増加している。国連では、“Unite for diabetes”をスローガンとして世界が糖尿病克服に向かって歩み出そうとしている。日本においても、国がその政策である「健康日本21」で糖尿病を重大な疾病の一つとして位置付け、その撲滅に乗り出している。

糖尿病の予防と治療には生活習慣の改善が重要であり、カロリー制限、脂肪制限、アルコール制限といった食事療法、一日一万歩以上の歩行といった有酸素運動療法が最も効果的である。臨床診療に関しては、

今は一〇〇〇名近い外来患者を担当しており、多くの患者さんから寄せられた信頼には本当に感謝している。患者さんの心に響くような、モチベーションに繋がるような一言を毎回可能な限り持ち帰っていただけ

活習慣病の発症予防、進展抑制等に役立つことを期待しつつ、努力を続けている。

出合いを大切に

プライベートでは、小学校一年生の娘がいる。知的好奇心が満たされることが大好きなようで、将来を楽しみにしながら、育児も「育自」としてエンジョイしているところである。

振り返ると、自分の人生はさまざまな方々との巡り合いによって、より豊かになってきた。この人との出合いを今後も大切に、し、初心を忘れず、患者さんの健康のために少しでもお手伝いができるよう、楽しい臨床診療を目指して努力していきたいと思う。また研究に関しても、諸先輩方ははじめ、同僚や後輩の方々、環境等に恵まれていることに感謝しながら、互いに協力し合い人類のために少しでも貢献できるように頑張っていきたい。これこそが今まで恩恵を受けた生命保険協会の皆様をはじめとするすべての方々への恩返しとなると思う。

今後感謝する気持ちを忘れず、自覚と誇りを持って、これまでの、そしてこれからの新たな出合いを大切に、幸せな人生を歩んでいきたいと思う。

感謝する気持ちをお忘れずに

一九九二年国際文化教育交流財団セイホスカラー奨学生。中国出身。八五年十月に来日、国際学友会日本語学校での日本語学習を経て、八八年四月から東京大学理科Ⅲ類に入学、九〇年四月から医学部医学科に進学、九四年三月卒業、医師国家試験に合格。四年間臨床を経験した後、九八年四月から東京大学大学院医学系研究科に入学、二〇〇二年三月卒業、医学博士号取得。現在同大学医学部附属病院糖尿病代謝内科で臨床診療に携わる傍ら、研究活動を行っている。

東京大学医学部附属病院
糖尿病代謝内科
医師 飯塚陽子
いづつか ようこ

❖小さい頃の夢の実現

今日の私があるのは、これまでの諸先生方や、先輩方のご指導をはじめ、たくさんの方、出会ったすべての方々のご援助とご協力、そして家族の支えがあったからだと固く信じており、この場を借りて、心より感謝申しあげたいと思う。

来日した当初は、「こんにちは」と「くんばんは」も区別できなかったのだが、独学で二カ月ほどで電話を掛けられるようになった。その後日本語学校で本格的に日本語の勉強をはじめ、先生方のご指導のお陰で、日本語特有の曖昧さが日本の文化にも通じているところがあると分かった。日本

語の難しさを噛み締めながらも、日本舞踊や、生け花など日本の文化にも触れたり、また他の国の留学生の方々とも異文化交流ができ、とても充実した日本語学校生活であった。

東京大学在学中においても、医学勉強の傍ら、自分の日本語力と立場を活かし、日中友好記念コンサートの司会を務めたり、中国大使館のさまざまなレセプションの司会を担当したり、中国語を教えたりした。また「留学生が先生」という教育プログラムにも参加して、日本の中学校に行き、中国の文化を紹介するとても貴重な体験もさせていたなど、自分の立場を大切にしながら、異文化交流に少しでも貢献できた

●国際文化教育交流財団は、経団連第一代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一七二名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国四九〇名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

らと思い、さまざまな活動に参加した大学生活であった。一方、中国医学にも興味を持ち、通信教育で中国医学を学び、夏休みや冬休みを利用して、中国の大学で実習するなど、自分の長所をフルに活用できた大学生活でもあった。またいろいろな奨学金を頂くことができたお陰で、勉学に専念することができ、とても有意義な大学生活が送れたことに、改めて心から感謝を申しあげる次第である。

今はこのような活動に参加する機会が少なくなりましたが、小さい時から遺伝子や人に興味を持ち、将来人類のために少しでも力を尽くせたらと思っていた自分が、医学博士号を取得してからも、東京大学医学部附属病院糖尿病代謝内科で臨床診療に携わる傍ら、インスリン抵抗性の原因候補遺伝子を探る研究活動も続けている。まさに小さい頃の夢が実現した喜びと責任、使命の重大さを噛み締めながら、楽しく臨床診療、研究活動の毎日を送っている。